北海道教育大学
へき地・小規模校教育研究センター
HUE RISE

第21回へき地・小規模校教育推進フォーラム

学校力が向上する遠隔合同授業

ー徳之島町から学ぶへき地・離島教育の魅力ー

主催　北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター
共催　全国へき地教育研究連盟、北海道へき地・複式教育研究連盟
後援　文部科学省（予定）、北海道教育委員会、札幌市教育委員会、鹿児島県教育委員会、徳之島町教育委員会

日時　令和5年3月20日（月）15:30～17:30
会場　北海道教育大学事務局第1・2会議室・オンライン同時配信
（札幌市北区あいの里5条3丁目1-3）

参加申込

事前申込が必要です。（申し込み期限は、令和5年3月13日（月）

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センターホームページの「へき地・小規模校教育推進フォーラム」のタブか、右のQRコードから申込をお願いします。

フォーラム当日までに、ミーティングURLと資料等をメールでお送りします。多くの皆様の参加をお待ちしております。

申込フォームQRコード

● プログラム

1　開会

2　事例報告

①「教育データ利活用の未来を徳之島型モデルの環境整備から見据える」
佐藤　正範　（北海道教育大学未来の学び協創研究センター）

②「徳之島町の取組から見えてきた協働による授業づくりの可能性」
前田　賢次　（北海道教育大学札幌校）

③「へき地・離島小規模校の課題への対応が遠隔合同授業=「学校力」を高める取組みとして」　福　宏人　氏（徳之島町教育委員会教育長）

【コメンテーター】　大城　智紀　氏（文部科学省初等中等教育局GIGA StuDX推進チームチームリーダー）
【司会】　川前あゆみ（北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター副センター長）

●お問合せ先
北海道教育大学教育研究支援部連携推進課
crc@j.hokkyodai.ac.jp　011-778-0942（担当　小林）
北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター
kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp　0154-44-3239（担当　小野）

「学校力を高める遠隔合同授業
－徳之島町から学ぶへき地・離島教育の魅力」

第21回へき地・小規模校教育推進フォーラム

第21回へき地・小規模校教育推進フォーラム「学校力を高める遠隔合同授業-徳之島町から学ぶへき地・離島教育の魅力」が、令和５年３月20日㈪に、北海道教育大学事務局第１・第２会議室を会場にして開催されました。当日の来場者・オンライン参加者総数は130名と年度末にもかかわらず全国各地から大学関係者、教育行政関係者、学校現場関係者にご参加いただきました。

本学へき地・小規模校教育研究センター玉井康之センター長が開催挨拶を、本学未来の学び協創研究センター後藤泰宏センター長が閉会挨拶を行い、司会は川前あゆみ副センター長が行いました。また、コメンテーターとして、文部科学省初等中等教育局GIGAStuDX推進チームの大城智紀様にコメントを頂きました。

短時間でしたが、会場からも多くの方にご発言いただき新たな方向としての遠隔合同授業の関心の高さがうかがえました。

▲北海道教育大学札幌校の対面参加会場

※以下には、当日の各発表について本学へき地・複式教育研究センター発行の『へきけんニュース125号所収より、一部編集して概略を掲載いたします。

【事例報告】

①「教育データ利活用の未来を徳之島型モデルの環境整備から見据える」

報告者：佐藤　正範（北海道教育大学未来の学び協創研究センター特任講師）

②「徳之島町の取組から見えてきた協働による授業づくりの可能性」

報告者：前田　賢次（北海道教育大学札幌校准教授）

③「へき地・離島小規模校の課題への対応が遠隔合同授業＝「学校力」を高める取組みとして」

報告者：福宏　人氏（徳之島町教育委員会教育長）

コメンテーター

大城　智紀氏（文部科学省初等中等教育局GIGAStuDX推進チーム）

当日は、本学へき地・小規模校教育研究センターの２名の関係者が複数回の現地調査を通じて関わってきた徳之島町の遠隔双方向授業の教育効果について報告しました。そして、徳之島町教育委員会福宏人教育長にも登壇いただき、町内にある複式校を繋ぐ遠隔合同授業の取り組みが「学校力」を高める取り組みに発展してきた経過を報告していただきました。

事例報告①では佐藤特任講師から、GIGAスクール構想の現在地として到達点（ICTの環境整備）と課題（具体的な活用課題）が提示され、徳之島型モデル環境整備の状況を示されました。極小規模校をつなげた遠隔双方向授業の取り組みでは複式学級担任教師らが配信先の相手校の児童に黒板の板書を共有し児童の手書きノートに学習記録を残す取り組みやGoogleDocのデジタルノートに学習記録を残していく取り組みといったデジタルとアナログの指導方法を紹介しました。綿密な授業資料とデジタルノートを駆使しつつ、いかに教師だけではなく児童も日常遣いにできるのか、事例報告からその取り組みについて言及しました。

GIGAスクール構想が始まる６年以上前からいち早くICTの利活用に努めていた徳之島町の先生方のチャレンジが複式学級の「ずらし」の指導場面を改善していくドリル教材の活用に役立てられていたこと、そのことが児童の理解度を把握することにもなり細やかな指導のためのデータとして活用されてきました。佐藤講師は、一連の取り組みについて学習データの蓄積は児童自身の学習履歴を構築するものとなり、先生方の子供の見取りに活用していくことを可能としたデータ活用の充実度を高く評価していました。さらに、教育データ利活用は現在進行しているGIGAスクール構想の中でも重視されているところであり、今後は校種間でのデータ活用の連携、評価の革新、教育観等、徳之島型モデルは他の自治体にも有益な取り組みとして普及していくことを期待されていました。

事例報告②では前田准教授から、徳之島町の実践研究からへき地複式校間における遠隔合同授業の持続的実施のための要件を以下のように提示されました。

・ICTの教育利活用を進めることが目的でなく、自らの教育活動における課題を自覚し、その克服のためにICTをどう用いるかという一貫した立ち位置で貫かれていた。
・学校間を越えた取り組みの中で、遠隔合同授業開発の共通理解を図るとともに、そこでのICT利活用の裁量は、教育的効果の実験と検証を導く当事者に任されてきていた。
・徳之島型と３つの小学校遠隔型にみられる多様な遠隔合同授業と、その中での多様なICT利活用がなされてきたが、それは硬直化した既有モデルの踏襲ではなく創出であった。
・徳之島型では国語が最も多く取り組まれているが、説明文などに関わって自分で作文するための学習場面が多い。物語教材では、音読発表を除けば読みに関わるものはほとんど見当たらない。
・３つの小学校遠隔型では、取り組みの当初は高学年で徳之島型と同様に国語、算数で、取り組みを始めているが、現在は高学年で社会科、理科の遠隔合同授業にも取り組んでいる。

前田准教授は、一連の現地視察調査から徳之島町では、朝の会や修学旅行など特別活動や他県の学校との遠隔授業にも取り組んできていることにも着目しています。それは地域の歴史や豊かな自然環境に関わる体験や経験を通した総合的な学習の時間の蓄積を、徳之島の世界遺産登録を契機に発展させる取り組みも始まりつつあることが確認できました。主に教科書に即した日々の学びとしての教科の遠隔合同授業の教育内容に、教科以外の豊かな学びを取り込み、遠隔合同授業の教育内容研究を再構成することで、徳之島町の実践がさらに発展する可能性を秘めているとして今後の展開に期待されていました。

最後に事例報告③では、福宏人教育長から、へき地・離島小規模校の教育課題とその対応、遠隔合同授業＝「学校力」を高める取り組みの事例及び成果等について、そして教育課題解決に向けた新たな教育への挑戦としてご報告いただきました。

特に遠隔教育のメリットには４点あげられています。①教師と児童の対面する時間の増加、②多様な考えに触れる機会の増加、③発表する喜びや認められた時の達成感、④教師の資質向上です。他方で、遠隔合同授業のデメリットを視点化（３つ）し、学校力を高める取り組みとしてデメリット解決の視点に置き換えて精査されてきました。その視点１は単元の精選と指導計画の作成、視点２は複式指導における授業改善、視点

３は日常化に向けた工夫や対策です。これまで複数年かけて学校間をチーム化して視点を洗い出し、複式少人数学級のメリットの拡大とデメリットの緩和に取り組まれてきました。福教育長の示唆に富む実践報告は、今後、他の自治体での普及に大変参考になる内容として参加者は学びを深めたようです。

▲講評　文部科学省中等教育局　大城智紀氏

登壇者３名の事例報告のあと、フロアを交えた質疑の時間には、それぞれの報告内容が実践を踏まえた内容であったことから、実に具体的な質問や事後アンケートでの感想を頂戴しました。紙面の限りその一部をご紹介します。

まず参加者質疑では、「他県との遠隔交流ができた条件や効果について、遠隔合同授業の際には理科の実験はどのように対応してきたのか」、「子どもどうしの人間関係の固定化の課題は“徳之島型モデル”によって何か変化が見られたか」、「遠隔合同授業の際の他校で学ぶ児童の学習評価はどのような工夫をしているのか」、「GIGAスクール構想の推進にあたって教員研修はどのような工夫をされているか」、「教員養成の大学はどのような役割を果たしているのか」、といった熱心な質問があり、登壇者のそれぞれの立場から細かい実施方法が説明されました。

事後アンケートでは、新しいチャレンジ性と可能性を広げる取り組みの必要性などの意見が寄せられました。

以下にご意見を紹介します。

▷「へき地におけるICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びの取り組みについて理解が深まりました。今後、社会状況が変化しても持続可能な取り組みとなることを願っています。」

▷「私たちが想像できるゴールの設定ではなく、さらに突き抜けていく新たな方向のオリエンテーションすることが必要な気がします。」

▷「学校がある地域、人数などの個性もメリットなのだと思います。子どもも先生もみんなが面白くチャレンジしているプロセスが未来の風景なのかもしれません。」

▷「ホームスクール的な個別に対応するメリット、実際に会う機会をもつことで生まれる喜びやメリット、古い通信教育のような学びによるメリット、新しい双方向通信のメリット、ICTツールによる記録などのメリット、のメリットが活かせると良いのでしょう。」

▷「どなたかがまとめで言っていた小規模・へき地校ならではの教育を活かした成果なのだと思います。」

▷「教員が外国の教員と友達になる研修があれば、英語学習も日常的かつ特徴的なものになるような気がしました。」

▷「徳之島町の遠隔合同授業の取り組みの組織性、本質の学びをとらえる深い考えに、改めて感銘を受けました。」

▷「有人離島を多く抱える県にとって、離島での教育活動は環境的に様々な制約があり、児童生徒、地域特有の課題を見ることが出来る。今回のICTを活用した実践は離島県にとって有意義な実践事例を学ぶことができた。」

▷「子どもたちの主体性を育み、教師の複式学級等での新しい指導法を提案して頂いた。」